

金森幸介はいつも新しい。

たとえば、ボブ・ディランがそうであるように、彼は自身の過去を振り返らない(でも、まあ、時々振り返る?)。もちろん、これは音楽活動上のことで、私生活は知らない。すべてのことに「振り返らない」ほど、ボブ・ディランも金森幸介も若くはないのだが、「過去を振り返らない」とは、何かに向かって、模索しながらも進みつつけるという気がする。彼らからは「歌うことにしか興味がない」という印象を受けるときがある。事実、彼らはスタジオ・レコーディング・アルバムを作り、そのセールスを記録するための大掛かりな宣伝活動を行うという従来の手法をとっていない。「歌うこと」以外、それにまつわる余計なことをしたくないかのよう。金森幸介が大好きなバンド、グレイトフル・デッドも同じ・・・というべきか、ファンはスタジオ・レコーディングされた商品待ち望んでいるわけでもない。(ファンが目にするのでできない)スタジオのなかにもこもって何かを作り上げることよりも、目の前にいて演奏してくれることのほうが楽しいことだと知っている。だからレコード会社もそんなアーティストなど相手にはしてくれない(ボブ・ディランは例外的で、レコード会社は彼を囲っていることを誇りだと考えているようだ)。まあ、とりあえず、既存の音楽シーン(金森幸介が属すると思われる「70年代フォーク」「喫茶フォーク」というカテゴリも含めて)のなかで、「過去を振り返らない」という行為、アーティストとしての姿勢は稀有なものだろう。金森幸介はこう歌っている。「他に何もしたいことなんか無い」と。

「振り返る」ことはしないつもりだが、本稿の性質上、金森幸介のキャリアについて触れておく。詳細はwww.hoyho-y-records.comにある。ついでに01年にブルース・インターアクションズから再発売された『箱舟は去って』にも彼のキャリアが書かれている(ビクターから発売された紙ジャケット仕様のものにはないので注意)。さらに詳しく知りたい方は金森幸介のライブに通いつめることをオススメする。金森幸介もごく稀に「振り返る」ことがあるから。

はじめは1970年、フォーク・デュオの小さなオルフェだった。ラジオ局のオーディションにソロ・シンガーとして応募したことから彼はデュオを組んだ。本人の話し振りだと歌手となることは別に小さなオルフェには自主的ではなかったような感じがする。だからなのか?金森幸介は現在もデビュー曲「みずいろのポエム」を観客からリクエストされてもそれに応じることはない。ちなみにこの曲は06年に発売されたばんばひろふみのアルバム『いまはまだDre-amer』で取り上げられている。

小さなオルフェでのコンビ解消後、金森幸介は都会の村人、I.M.O.バンドで活動。MBS「ヤング OH! OH!」などのテレビ番組のエンディング・テーマでその姿を見た人も多いかもしれない(筆者もそのひとり)。この頃に金森幸介という歌い手がいることを知った。

彼がソロ・シンガーとなったのは1975年、前記した『箱舟は去って』で、そこには渋谷毅、中川イサト、細野晴臣などの多くのゲスト・ミュージシャンが参加していた。本人のことによると「そのころゲストをたくさん入れるのが流行っ

ていたから」だというのが、「あのアルバムほどレコード会社から無視されたものも珍しい」と話している。しかし相次ぐテレビ出演や加川良とのディスクジョッキーで人気を得ていた金森幸介のアルバムは大阪市内の大手レコード店ヒット・チャートの(一瞬だが)1位に輝いていた。

金森幸介が五つの赤い風船に参加していたのもこの頃だが、彼は76年にもソー・バッド・レビューをバックに従えソロ2作目『少年』を録音している。おそらく彼の生涯でもっとも多くの時間をレコーディングに費やした時期だろう。アルバム『少年』収録後、ロサンゼルスでデヴィッド・リンドレーとシングル「かけおち / 旅の途中」を録音している。このときデヴィッド・リンドレーが発したことは「オリジナリティとは何か?」が、アーティスト金森幸介のアイデンティティとなり、それを探求しつづけることが以降の活動の基盤となっている(と思う)。

70年代後半、金森幸介はアコースティック・ギターから黒のレス・ポール(トレモロ・アームを無理やり取り付け)に持ち替え(どかがオリジナリティやねん)、大阪のローカル・バンドだったコールドラビッシュをバックにブロークン・ウインドウとして活動。さらにそのバンドに有山じゅんじ、内田勘太郎を加えたロックンロール・ジプシーは爆音バンドと化し、時代とともに金森幸介の音楽からは「70年代フォーク」の陰を潜めていった。80年代にはいとと金森幸介はツイン・ドラムス、スティール、エレクトリック、アコースティック・ギター、マンドリンからなる11人編成のバンド、ザ・メロウとして活動。ザ・メロウは人数だけではなく、メンバー全員がコーラスを受け持つ得意なバンドであった。もちろん彼はバンドによって、演奏形態によって歌い方も大幅に変え、「旅の途中」というよりは模索の途中。手探りを繰り返していた。

20年以上もレコーディングというものから遠ざかっていた金森幸介だが、97年に白井幹夫(当時ハイロウズ)とともに『緑地にて』を服部緑地公園にある野外音楽堂で録音。現在は春一番コンサート(70年代を通して大阪で開催されていたイベント)が行われている会場だが、80年代は金森幸介主催のもとフリー・コンサート(入場料無料)が開かれていたところである。『緑地にて』以降、99年に『静かな音楽になった』、00年『LOST SONGS』、01年『金森幸介』、CD5枚組『50/50』、02年『金森幸介ライブ・シリーズvol.1』、03年『vol.2』と溢れ出るようにアルバムを発表している。

「もうアルバムのためのレコーディングはするつもりはない」と話している金森幸介だが、歌は書きつづけている。冒頭に記したようにスタジオ・レコーディングよりもライブ活動に重点をおき、既存の音楽シーンからは亜流となったアーティスト。彼らには「テーパー」と呼ばれるライブを記録するファンが多くなる。金森幸介の場合も同様で、ホイホイ・レコードもそのひとりとなった。金森幸介のライブを記録し、それを商品化することを彼は拒まなかった。金森幸介は自身のライブで「ぼくとホイホイ・レコードは関係なく、「録音する」といわれたので『そうしたら』と答えただけ」とその経緯を観客に伝えている。これはグレイトフル・デッドのテーパーに対すること答えと同じで、ライブ録音を許可する行為のなかには「モラルがあってルールはない」という思考があるからだろう。

ホイホイ・レコードと金森幸介がこのことについて話し合っている07年末、彼は(21世紀を代表するギタリストになるだろう)デレク・トラックスのライブをダウンロードすることに躍起になっていた。インターネット上でライブ音源が溢れていることを彼は肌で感じていた。ライブ音源の流出を食い止めることそのものが無理なことである・・・というよりも、ライブ音源こそがリアルなものであるということを彼は知っていたのではないだろうか。録音機器が発達した今日では、密室であるスタジオで最高水準の音質、音色、演奏技術でも作り上げることができるのだから。というわけで、ホイホイ・レコードは金森幸介のライブ12公演を08年に録音した。本作はそのベスト・ライブ(?)9曲とホイホイ・レコードの全身であるポカポカ・レコード時代に録音した2曲を加えてのもの。タイトル『roll on road vol.1』というのは筆者のhpから取ったもの。ニール・ヤングの『road rock vol.1』とは無関係である。ニール・ヤングがそのアルバムを発表する以前からわたしのhpは存在していた。選曲の基準は「ピート・タウンゼント」「たとえば」「忘れものを取りにいこう」は近年の金森幸介の傑作として、このアイデアが浮かんだときから収録を決めていた。「いいこと」「Happyendを探して」「ふたりは」「ちがう言葉」「Help Me」が洩れてしまったことに特別な意味はない。特に「Happyendを探して」は最後までで悩んでいたが、収録時間の都合で仕方なく外すことにした。もう1曲、止むを得ず外した曲のなかに「Life Goes On」がある。これは4月9日、大阪Heaven's Doorで録音したものだ。金森幸介はこの曲のなかで「つまらないフォーク・ミュージック」と口走っている。同曲の歌詞と照らし合わせると興味深かったが、これも時間の関係で収めることができなかった。既発表曲のなかにも最初から入れるつもりでいたのが2月23日、神戸こずみくくでの「美しい絵を描く人たちがいる」と2月16日、川口Live Café Rootsでの「悲しい日々」である。前者は冒頭に阪神・淡路大震災のことに触れ、実際に被災者だったろう観客が金森幸介の話と歌に深く頷いていることが印象に残っていた。後者はカーティス・メイフィールド・ヴァージョン。キーを上げてのアレンジで歌い出しの部分で観客の失笑もあったが、徐々に金森幸介のペース(熱唱ぶりに)客席が引き込まれていった。演奏後は、水を打ったように静まり、少し間があって大きな拍手が起こった。金森幸介の年齢(50代後半)でキーを上げる無茶な挑戦だった。

本作の前半、アルファベットのタイトルばかり4曲も並んだのは偶然。80年代金森幸介をイメージしていたら、この内容になった。

「悲しい日々」を2曲も収録したのは、08年末、宝塚歌劇団による「銀ちゃんの恋」のDVD化を記念してのもの。「銀ちゃんの恋」には「三人の心」と題した「悲しい日々」が挿入されている。同曲はI.M.O.バンドの唯一のアルバム『Cata-Coto』に収録され、上田正樹、時任三郎、山崎まさよしらによってカバーされた金森幸介の代表曲のひとつで、彼が18歳のときに書いたものだ。本作ではそのインスタ・ヴァージョンを収録した。コーラスは有山じゅんじ。

本当はまだまだ収録したいライブ・テイクがあったが、それはらはまたこの次にするつもり。しかしこれからも金森幸介のライブはつづき、それらを録音していくわけだから、収録したいライブ・テイクもどんどん増えていくことだろう。これによって金森幸介は「日本のグレイトフル・デッド」になる?